

---

# **アニメが好きな超能力者の友人**

志信

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アニメが好きな超能力者の友人

### 【NZコード】

N6922B

### 【作者名】

志信

### 【あらすじ】

ごく普通の少年である秋山恵一は、親友であるコーリンとともに買い物に出かける。二人の乗ったスクーターはパトカーとすれ違い、そのまま互いに走り去った。

『あなたには、普通の人にはない特別な力があるのよ』  
アニメのキャラクターは、テレビ画面の中でそう言った。

一人で共用している部屋の小さなテレビで、少し前に流行った作品のDVDを観ているのは一組の男女。

平均よりやや小柄な体格の少年、そして長い黒髪が印象的な少女だ。  
「やっぱこのシーンよね。世界の運命を押し付けられるっていうか  
や。そういう责任感がぐっとくるよ。うん」

「そうかなあ。このアニメが面白いのは認めるけど、今のシーンは  
ありきたりじやないかと思つ

互いにストーリーの感想を述べたり声優の演技を批評しながら、楽  
しそうに画面を眺める二人。

特別用事のない時などは、いつもやつてのんびりアニメ鑑賞を行うの  
が彼らの趣味だった。

この世の大抵の苦しみとは無縁な、平穏で幸せな一時。しかし、そ  
んな時間は唐突に終焉を迎えることとなる。

何者かが階段を昇つてくる音に続いて、部屋の扉がノックされたの  
だ。

「 恵一、入るわよ  
「はーい」

扉を開けたのは少年 あきやま けい一の母親だつた。

手には買い物籠を持っている。近所のデパートで、資源節約キャンペー  
ンの一環として販売されているものだつた。

これを使って買い物をすると様々な特典があるらしい。

そんなことが店内に掲示されていた気がする。恵一は首だけ回して  
母を見た。

「 何? 」

「暇なら買い物に行つてきてくれない？ テイツシユペーパーが安いんだけど」

「めんどい」

「何言つてるの。恵一が一番使うものでしちうが、嫌そうな顔をした恵一も、そう言われば頷かざるを得ない。母の主張を裏付けるように、部屋の隅に置かれたゴミ箱の中には大量の丸めたティツシユが捨ててあった。

恵一は軽い花粉症持ちだった。

対策用品が必要なほど辛い症状はないものの、この時期はどうしても鼻水が止まらない。今朝も鼻炎薬を服用している。

「……わかつたよ。行つてくる」

「お願ひね」

買い物籠をその場に置き、母は一定のリズムで一階への階段を下る。リビングで菓子でもつまみながら、午前の情報番組でも観るつもりなのだろう。恵一は小さなため息を一つ、DVDプレイヤーに手を伸ばした。

「あんなにティツシユを使つたのは、この部屋にえつちい品物はないわね。パソコンの中かな？」

「花粉症だよ。ほら、コーディンも聞いてただろ？ テイツシユ

買いに行くぞ」

「おつけ。続きを帰つてからね」

恵一に促され、コーディンと呼ばれた少女は座布団から立ち上がった。

十八歳の恵一は自動車免許を持つていたが、乗るのはもっぱら一輪車だ。

アルバイトをして購入した白いスクーターにまたがり、恵一は道路の左端を制限速度で走る。

薄手のシャツにジャケット姿。頭にはスクーターと同じ色のヘルメ

ツトをかぶつていた。

「もつとスピード出せないの？ 下手っぴ」

「何とでも言え。事故るよりマシだ」

青いトレーナーを着たコーディンにからかわれても、決してスピードは上げない。若者には珍しい安全運転である。

当然と言えば当然かも知れない。ハンドルを握る恵一と背中合わせに座ったコーディンは

ただでさえ不安定な姿勢でいるにも関わらず、ヘルメットや防具の類は一切身につけていないのだ。

これで転倒しようものなら大怪我は免れまい。恵一が慎重になるのも無理はなかつた。

「こける乗り物だから面白いんじょ、バイクは。

少しくらい転んだつて、通報される前に逃げちゃえばいいじゃない」

「バイクが壊れたらどうする気だよ。それに見り」

赤信号に捕まりスピードを緩め、交差点の向こう側を顎で示す恵一。反対車線に行列を作つていてる車の先頭に、白と黒のツートンカラーが居座つていた。コーディンが口笛を吹く。

「おお、ポリ公がいたか」

「そういうこと。パートカーの前でこけたら、さすがに捕まるだろ」「ちえー、運がないなあ」

残念そうにつぶやき、コーディンはスクーターからひょいと飛び降りる。

そして今度は恵一と同じ方向を向いてシートに腰を落ち付けた。運転者の腰に腕を回す、一般的な二人乗りの姿勢。

「ほれ、青になつたよ。それ行け  
「わかつてる」

右手首を手前に捻り、恵一がアクセルを開く。

二人の乗つた原動機付自転車が警察車両とすれ違い、そして何事もなく互いに走り去つた。

「で、ティッシュユーティリで売つてたつけ？」

「一階でいいはず」

コーディンが問い合わせ、恵一が独り言のよう答えた。  
人の過ごしやすい気温に調節されたデパートの店内を見るに、客の入りはまずまずのようだ。

いつもならこの時間はパン屋やファーストフードのコーナーに人が集中するものだが

今日はティッシュユの他にも様々な商品が安売りされるはずだった。  
「早く買わないと売り切れそうね」

恵一が領き、店を見渡すコーディンを追い抜くように進み始めた。  
幼い頃から何度も利用しているデパートだ。忘れっぽいコーディンはともかく、恵一は商品の配置を記憶している。

トイレ用芳香剤や掃除用具の置かれた棚を左に曲がり、買い物客の間を縫うようにして前進。すぐにお目当ての品を発見した。  
持ち手を兼ねるぴっちりしたビニールに包まれた、五箱ワンセットのティッシュユペーパーを手に取る。

「危なかつたんじゃない？ これ」

コーディンが言った。棚に置かれた商品の残りは、もはや数えるほどしか残っていない。

もう少し遅く来ていれば売り切れていたかも知れなかった。

「まあ、私達には関係ないけどね。さ、早く帰つて続き観ましょ」  
釣られて棚を覗き込んでいた恵一を尻目に、コーディンはせつやとソジに向かつて歩き出した。

そして、正面に金髪の女性が立つていてことに気付く。  
すらりと高い背に、やや癖のある明るい金髪。海外のモデルを思わせる美貌。

コーディンはじろじろとスース姿の女性を眺め回す。彼女の視線が、ようやく腰を上げた恵一に向けられていたことに気がついたからだ。  
やがて女性が動いた。コーディンや他の客のことなど目に入つていな

いかのように、恵一への最短距離を一直線に進む。

ぶつかりそうになったコーポラスが身をかわすが、女性はまるで気にしなかつた。

「何よ。恵一に何か用？」

靴のかかとを鳴らす女性の背中を、コーポラスが追う。

「あの、すいません」

見知らぬ女性、しかも日本人では有り得ない外見の美女に日本語で話しかけられ、

恵一は戸惑いを通り越して軽いパニックに陥っていた。

「お、俺ですか？」

「そうです。実は私どもの方では、日本の若者について調査をしておりまして。

もし宜しければ、簡単なアンケートにご協力願えませんでしょうか

声だけ聞いたら外国人だとは思えない滑らかな口調。

恵一はこういうシチュエーションが苦手だった。

あまり社交的な性格ではない恵一は、軽く人見知りをする傾向がある。見知らぬ人と話をするのは好きではない。

しどろもどろになりながらも、どうにか断ろうとする。

しかし相手は人を呼び止めて飯を食っているプロである。簡単には引き下がらなかつた。

「えと、あの。急いでまして」

「お時間は取らせませんので」

「いや、でも……」

「ほんの数問です。協力してくださいれば、少ないですが御礼もできます」

「そ……それなら、あ、いやその」

「恵一！」

そこを一喝したのはユージンだつた。

恵一は親に叱られた子供のように肩をすくめ、頬を膨らませた少女の側をちらりと見る。女性がわずかに訝しげな顔をした。

「うだうだやつてないでビシッと断るーいつまでもアニメが観れないじやないの！」

「あすすいません！」

尻を蹴飛ばされ、恵一は女性に頭を下げ下げレジに走る。

女性は慌てて後を追おうとしたが、田玉商品の置かれたこの周辺は人通りが多い。

小柄な少年の姿は人の波に呑み込まれ、やがて棚の角へと消えていった。

女性はあきらめたようにかぶりを振ると、近寄ってきた東洋系の男性に向き直つた。

「ごめんなさい。失敗したわ」

「またか。これで三度目だぞ……くそつ」

日本人でないというだけで目立つのが日本という国だが、だからと言つて彼女らを物珍しく見る者はいない。

せいぜい流暢な日本語を話す女性を見て驚いた顔をする客が閑の山だ。女性が言つた。

「どんなアンケートを装つても誰が話しかけても駄目ね。あの子、アンケート調査にトラウマもあるのかしら」

「案外そうかも知れないな。

まあ、誰かに口うるさく言われてるんだろ。知らない奴について行くなどでも

「何にせよ、この作戦はもう駄目ね。別の手を考えないと」

「ああ。俺らの班だけ調査が遅れて」

ふいに男性の胸を襲う、断続的な振動。女性の耳にも高い電子音が届く。

男は胸元から携帯電話を引っ張り出して耳に当てた。見守る女性の前で一言二言を話し、通話を終える。

もとの位置に電話を戻しながら男が言った。

「ちょっと面倒なことになつた。観察対象のもう片方もこのデパートに入つたらしい。

隊長はこの機会に例のテストを始めるつて言つてる

「今から? ズイぶん急な話ね」

「仕方がない。なるべく唐突に開始しろというのが上の命令だ」

「テストであることを気取られれば、能力を全く使わない、使つたとしても全力でない可能性が出てくる……だつたかしら」

「そんなことを言つていたな。とにかく、民間人が巻き込まれないよみにしよう。

後は上が上手くやるだろ?」

「了解」

「ねえ、前にもこんなことがなかつた?」

財布に釣り銭をしまう恵一にコーディングが尋ねた。

恵一は何も言わずに彼女を見るだけだったが、構わず続ける。

「こないだ街を歩いてる時も捕まつたじやん、どつかの業者の外回りさんにさー。

何? 恵一、アンケートを取らされる星のもとに生まれたとか?」

「何の占いだよ、それは……。ただの偶然だろ」

脇に挟んでいたティッシュ箱を買い物籃に放り込み、恵一は小声で答えた。

すぐ隣にいるコーディングにだけ聞こえる声量を妙に思つたのだろうか、向かいで買つた品を袋にしまつておいたおばさんが小首を傾げていた。

「さて、さつさと帰るわ。ここにいると、さつきのお姉さんが追いかけてきそうだ」

「それないと思つけど、おつけ」

会話を切り上げ、二人は出口に顔を向ける。

ちょうど新しい客が入ってくるところだった。ラフな格好をした、五人組の男。

遠目にもそれとわかる、プロレスラーのような太い腕に携えていたのは、

「……銃？」

「ウソ、本物？」

驚く恵一やコーディン、その他の客や従業員の視線を一身に浴び、物々しい銃器で武装した男達が一斉掃射を開始した。

ずがががががががががつ

轟く銃声。巻き起こる悲鳴。我先にと駆け出す人間達。誰が気を利かせたのか鳴り響く非常ベルの音をBGMに、一階にいた人間は客も従業員もほとんどが、男達の入ってきたのとは逆の出入り口に殺到した。

中には腰を抜かしたり、事態を把握できずに呆然と立ちつくす者もいる。恵一もその一人だった。

ペたりと床に座り込み、かちかちと歯と歯を打ち鳴らしている。コーディンが怒鳴った。

「ちよつ、恵一！ヤバイよ、私達も逃げよう！」

「わ……わかってるんだけど……足が動かない……」

「腰抜かしたの？ もう、ほんとに弱つちいんだから、あんたは！ ほら、肩貸してとしゃがみ込んだコーディンを、暗い影が覆う。見上げれば銃口をこちらに向けた男がそこに立っていた。恵一がいよいよ震え出す。

「ちよつ、何よ！ 恵一にさわらないでよ！」

彼女のわめき声が聞こえないかのごとくコーディンを無視し、男はかばんをそろそろするように恵一を左脇に抱えると

空いた手でポケットから携帯電話を出し、いくつかのボタンを押して耳に押し当てる。

「目標を確保。これより合流します」

それだけ言って電話を畳み、巨体に似合わぬ俊敏さで走り去る男。

「ひら、待ちなさいよ！ 恵一を返して！」

とつさに飛び付こうとしたコーディンだったが、周囲には男の仲間達がいた。

下手にもみ合いになれば恵一が撃たれるかも知れない。その考えがコーディンの行動を一瞬だけ躊躇させ、

その一瞬が決定的な差となつた。

気がつくと男達はだいぶ離れた位置を走っている。今から追いかけても、追いつけない。

「恵一……」

コーディンは唇を噛んだ。

数分後、恵一は屋上にいた。

そろそろ暖かくなつてきているとはいっても、吹きさらしの高所は風が強く、肌寒い。

せめて屋内に立てこもってくれと恵一は思つ。屋上には恵一の他にも数人、両手首と足首をガムテープで縛られて一塊に座らされている。

目隠しをされていたり、口を塞がれていたりしないのは幸いなのかも知れない。

少し離れた位置には物騒なサブマシンガンを持った男が一人、非常階段を除けば唯一の出口であるドアを背に立つて見張り役だらう。

「コーディン……」

心細さからか、恵一は無意識にその名をつぶやいていた。

「友人がどうかしたのかしら？」

「え……」

程度の差はあれ皆が恐怖に震える中、一人平然と座っていた女性がそう声をかけてきた。

この特徴的な容姿は忘れようがない。恵一にアンケート協力を依頼してきた、あの外国人女性だ。

「あ、その、さつきは……」

「いいのよ。今はそれどこのじやないでしょ?」

「そうですね……何でこんなことにつき込まれちゃったんだら?」

死にたくないなあ……」

話しかけられて気が緩んだのか、恵一は本心をつぶやいていた。大好きなアニメのような非日常を望んだことがないと言えば嘘になるが、

だからといって命を賭して犯罪者と戦うような状況を願っていたわけではない。

そもそも銃で武装した相手に抵抗するつもりなど毛頭なかつた。現実と虚構の区別はできている。

「おい、勝手に喋るな。殺されたいのか」

見張りの男がそう言い、わざと音が鳴るよう銃を動かしてみせる。恵一は「ぐくりと睡を飲み込んだ。撃たれれば間違いなく死んでしまうだろう。そう思つと鼻の奥がツンとしてくる。どんな目に合わされようと、どれだけの恥をかこうと、死ぬのだけは絶対に御免だつた。

たとえそれが自分だけでも助かりたい。生きて自分の家に帰りたい。唇の辺りまで垂れた鼻水をすすぐ、恵一は見張りの男を見る。ゴージングがいた。

「つおりやああつーー!」

思い切り蹴り上げられたつま先が男の股間を直撃する。男は声もなくその場に崩れ落ちた。

落ちた機関銃は恐る恐る拾い上げ、万が一にも手の届かないところに放り出しておく。アニメで得た知識だ。

「コーディン……？」

「恵一！ 良かつた……殺されてたらどうしようかと思った」駆け寄ってきたコーディンの顔は、命の危機に晒されていた恵一よりもひどい泣き顔だった。

まず抱き付いて頬擦りし、恵一が縛られていることに気付くと急いでガムテープをはがす。次いで、他の者達のテープも同様に。

「さあ、早く逃げよう！ 大丈夫、中の連中も私がやつづけるから！」

「バカ言つな、危ねえ！ それより非常階段を使つたほうが早いだろ、見張りがいなくなつたんだから…」

「あ、そっか」

手を打つコーディンとため息をつく恵一を、屋上に捕まっていた客達がぽかんと見つめる。

「……あー、いや、その、気にしないでください。

とにかく下に逃げましよう、さつき言いましたけど、非常階段を使えば逃げられると思います」

おかしなものを見るような視線に気付いた恵一が、軽く頬を赤らめてそう言った。

シャツの襟もとに取り付けられた小型カメラを外して、胸のポケットに押し込む。

恵一に促される形でそろそろと階段に向かう列を眺めながら、女性は無表情に携帯電話のホール音を聞いていた。

三回田のホールで電子音が鳴り止み、代わりに低い声がスピーカー

越しに届く。恵一を捕らえた男の声だった。

『……俺だ。そつちはどうなつたんだ?』

「ダニーがやられたわ。人質は地上に逃げてる」

『何だと? 奴は無事なのか? それにテストのほうは? 大丈夫なのか?』

女性は急所を押さえて悶絶している男を一瞥し、

「とりあえず息はあるわ。予定とはだいぶ異なる結果になつたけど、貴重なデータも手に入つた。テストも成功よ」

『そうか……』

「後は予定通り、警察に捕まつておいて。適当に釈放されるよう手はずは整つているはずだから」

『わかった。しかし、ダニーがやられるとは。奴はどんな力を使つたんだ?』

問われ、女性は恵一を見る。恵一は最後の人質を階段に誘導し終え、安心したように腰に手を当てたところだった。

数秒の沈黙。

女性がゆっくりと口を開き、重苦しい吐息に乗せて返答する。  
「わからない……」

ビジネスホテルの一室で、女性はノートパソコンを立ち上げた。パソコンには外部マイクとカメラが接続されている。ほどなくして、画面に初老の男性が映し出された。

『……聞かせてもらおうか』

「はい、所長。彼は 秋山恵一は、間違いなく超能力者です。通常の人間とは明らかに違う能力を持つています。

残念ながら、もう片方の観察対象は単なる人間のようですが、女性が抑揚なく答える。

常人では有り得ない能力の持ち主　　超能力者の調査を行うのが彼女の仕事だ。

各国の共同出資で運営される、超能力の国際研究機関。彼女はその一員だった。

『テストの映像は私も見せてもらった』

男の言葉とともに画面の右上に窓が開いた。動画ファイルが再生されている。

やや不鮮明ではあったが、その場に居合わせた者であればそれがデパートの屋上で、見張りの男　　ダニーが倒されたときの映像だと気がついたろう。

ダニーが何の前触れもなく股間を押されてうずくまる。

サブマシンガンがふわりと浮かび上がったかと思えば明日の方向へと飛んでいく。

人質の手足を拘束していたガムテープが、誰の手も触れずに剥がれてしまつ。

『思つにこの恵一という少年は、念動力が使えるのだらう。

己の思うがままに物体を操作する　　大したものだ。今までの念動力の持ち主は

文庫本を数秒浮かび上がらせられれば良い方だつたからな』

「そのようですが」

そこで女性は発言を止めた。モニターの中の男が訝しげに片眉を上げる。

『……どうした?』

「彼の能力は、単なる念動力とは違うもののように思えます。

これは私の仮説ですが、聞いてもらつてもよろしいでしょうか』

『構わん。言つてみる』

「ありがとうございます。後で資料を送信しますが、秋山恵一について調査を進めたところ、

興味深い話がいくつか見つかりました

女性はパソコンの横に積み上げていたファイルから一冊を選び、力メラに移るようページを開く。

「まず彼は、独り言が異常に多い。夕食後、自室に戻つてから就寝するまで

ほとんど喋りっぱなしだった日もあるようです。

今回のテストでもダニーが倒れた後、何者かと言い争うような言動を見せていました」

言いながら女性はスピーカーの音量を上げた。

右上の動画はそろそろ終盤に差し掛かつており、恵一の怒鳴り声がノイズ混じりに聞こえてきた。

『 れより非常階段を使つたほうが早いだろ、見張りがいなくなつたんだから！

……あ！ いや、その、気にしないでください。

とにかく下に逃げましょう、さつき言いましたけど、非常階段を使えば逃げられ 』

恵一は一人で虚空に向かつて声を張り上げていた。

他の人質達が彼を変な目で見てているのも当然といえる、

この映像だけを見るなら、恵一の行動は幻覚を見ている麻薬中毒者と大差ない。

「また、幼少時の彼についても調査しました。

幼い頃の彼は、奇行の多い子供として知られていましたよ」

『 超能力が発現したということか？』

「それもありますが、他の子供達と遊ぶ時、決まって口にする台詞があつたようで。主な原因はそれかと」

『それは』

“友人ちゃんも一緒に遊んでいい？”です”

女性の持つファイルには、恵一の幼少期が事細かに記載されていた。彼が積み木や砂場で遊んでいる時、積み木やスコップが宙に浮いているのが何度も目撃されたこと。

友達に遊びに誘われた時は、誰かの手を引くような仕草をしていたこと。

そして、何かといえば『友人ちゃん』と口走っていたこと。

「上手く録音できませんでしたが、私も彼が友人　いえ、ユージンとつぶやいたのを聞いています」

『……今までの情報から考へるに、それは』

「はい。秋山恵一の周囲には、彼以外には視認できない何者かが存在すると考えられます」

ファイルを閉じた女性が静かに続ける。

「その者が物体を持ち上げれば、私達の目には物体が浮かび上がったように見えるということです。

そしてその何者かは、秋山恵一という人格とは別の、独立した自我を持つている」

もし恵一が通常の念動力の持ち主ならば　自分の思い通りに物体を運動させることができるならば、

あの時、彼が大人しく捕まってくれるはずがない。

その力で銃を奪い上げるなり、ダニーをそうしたように相手を無力化してしまえば良いからだ。

「殺すぞ」と脅された途端に能力を發揮するような臆病な人間が、拉致されようかという危機に力を使い済むわけもない。

恵一にしか見えないその何者かが、彼の意思に従つて動く操り人形だつたとしても同じことである。

「恐らくその何者かも、自分が秋山恵一にしか視認できないことを自覚しており、

そんな自分が好き勝手に動いてしまえば、秋山恵一が変人扱いされることまで予見できている。

秋山恵一と会話をを行い、彼の許しを得た時だけ、何かしらの行動を起こすのでしよう。

その何者かを、秋山恵一は”ユージン”と呼称していると思われます

物心ついた時からの友だつたとか、家族のような存在だったとか、彼女に抱く親近感は、そんな生半可なものでは有り得ない。恵一がユージンに抱く感情というのは、自分の手足に抱くそれと同種のものだ。

幼稚園に通っていた頃は、他の子供達から手ひどく虐められた覚えがある。

子供達は皆徹底的にユージンを無視するし、ユージンと遊んでいると氣味悪がつて近寄つてこない。

小学校に上がる頃になつて、ようやくその理由に思い当たる。

ユージンの声が聞こえ、ユージンの姿が見えるのは、どうやら自分一人だけらしい。

そう考えれば全てに納得がいく。

ユージンの姿が見えていなければ、彼女が何か物を持つていれば、その物は宙に浮かんでいるように見えるだろう。

ユージンの声が聞こえていないなら、彼女と会話をしている自分は、独り言ばかり言つている危ない人間に映るはずだ。

実際、人前でユージンと話さないよう心がけると、嘘のように嘘はなくなつた。

自分は特別な人間なのではないかと思った。

しかし、大好きなアニメの中ならともかく、現実にそんなおかしな話があるとは思えない。

きっと、他の誰もが自分にしか見えない友人を　ユージンのよくな存在を持っているに違いない。

そしてそれは、他の人間からは隠し通さねばならないことなのだ。自分がおかしな人間だと思われるのは、ユージンの存在を隠そうとしていなかつたからだ。しかし。

「なあ、ユージン」

「何？」

警察からの事情聴取を終えた帰り道。カーブの手前で減速しながら

恵一が言つ。

「今回のことと、ちょっと恐ろしい仮説を考えてしまった」

「ほほう。聞かせて」「らんなさい」

「やっぱり、ユージンが見えるのは特別なことなんじゃないかな、なんて」

「……自意識過剰じやないの、あんた」

ユージンが肩をくすぐめた。

わずかに憮然とした様子の恵一の頬を指でつつき、仕方なさそうに笑う。

「アニメの主人公じやあるまいし、現実にそんなことがあるわけないでしょ。

他の人们にも私みたいなのがいて、隠してるだけよ。

あんた、自分が夜な夜なアニメの美少女キャラをオカズにしてますー、って主張する？」

「それは濡れ衣だ。……でも、普通あんな風に命が危なくなつたら、誰でもユージンみたいなことをするんじゃないかな」

コーディンはその気になれば、どんな物体でもすり抜けられる。

屋上に来た時、出入り口の扉が開かなかつたのもそのためだ。試したことではないが、銃弾が通用するとも思えない。

「だったら皆、自分の友達は助けようとするんじゃないかな？」

実際コーディンはそうしただろ？」

「さあ？ 案外、鬱陶しく思つてるのかも知れないわよ？」

ここで死んでもらつたほうが、人の目を気にせずに好き勝手できると思つてるかも。

でなきや戦争や事故であんなにバタバタ人が死ぬはずないじゃん。  
……その点では確かに、私は特別かもね」

微笑むコーディン。腰に回された手の力が、少しだけ強くなつた気がする。

「ほら、飛ばしなさい。早く帰つてアニメ観るわよ」

「まだ忘れてなかつたのか」

カーブを抜けたスクーターが、法定速度付近まで力強く加速する。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6922b/>

---

アニメが好きな超能力者の友人

2010年11月25日02時37分発行